

# 多摩川流域における諸磯式土器の変遷と地域性

佐藤 亮太

## 要 旨

本論文は、多摩川流域とその周辺地域における縄文時代前期諸磯式土器の変遷とその地域性について論じたものである。住居址覆土からの一括出土資料を型式学的に検討し変遷段階を把握するという方法により、諸磯a式から諸磯b式に合わせて7段階の変遷段階を設定した。そして、描かれる文様や器形をもとに蕨手・渦巻文“類型”と鋸歯状文“類型”の二つを設定し、設定した変遷段階ごとにこれら“類型”の動態を検討した。

まず、諸磯式土器を、文様帯を区画する区画文に着目し分類を行った。そして、型式学的検討から諸磯a式土器を1段階、諸磯b式土器を6段階に細分した。諸磯a式は従来、2段階もしくは3段階に細分されるが、この地域では細分は難しくここでは1段階とした。諸磯b式は6段階に細分した。

そして、次に蕨手・渦巻文“類型”と鋸歯状文“類型”を設定した。蕨手・渦巻文“類型”は広域に分布する“類型”であり、鋸歯状文“類型”は広域に分布するものと局地的に分布するものとの中間的な様相をもつ“類型”であるとした。また、局地的に分布するものとしては櫛歯刺突文の土器があることを述べた。この分布範囲の異なる土器によって多摩川流域とその周辺地域での土器組成が構成されることを指摘した。そして、土器の分布範囲の差が地域間の交流や生活領域を反映したものであることを指摘した。

キーワード：縄文時代前期、諸磯式土器、多摩川流域、類型

## はじめに

現在の諸磯式土器の研究は資料数の豊富な北関東を中心に進められている。その中で、鈴木徳雄により「中部高地交渉連鎖網」が提唱されている（鈴木1996）。そのような関係を持つ地域に対して、南西関東はどのようなかわりをもっていたのか検討する必要がある。

多摩川流域では古くから発掘調査が行われており、諸磯式期の遺跡も数多く調査が行われている。その中で、大坪宜雄や羽生淳子、岩橋陽一などによってこの地域における諸磯式の地域性が指摘されてきた（大坪1984, 羽生1987, 岩橋ほか1992）。このような地域性に対し、中西充はT.N.No.406遺跡報文において地域を踏まえた土器論が必要であるとした（中西1986）。しかしながら、そのような地域を踏まえた土器論がこの地域において展開されているとは言い難い現状がある。

そこで、本稿では、諸磯a式、諸磯b式における多摩川流域での変遷と地域性を踏まえ、「中部高地交渉連鎖網」に組み込まれている北関東との関係性について検討していく。

## 1. 研究史

### 1-1. 諸磯式の成立

諸磯式土器は1921年に榊原政職によって提唱された型式である（榊原1921）。この時、榊原は「厚手式」・「薄手式」より古い段階に位置づけている。その後、山内清男により縄文時代前期の繊維土器に後続する段階に位置づけられる（山内1928）。そして、諸磯式土器はa→b→cの三段階に細分された（山内1939）。その際、山内は諸磯a式について「比較的薄手で、縄紋が多く、文様少く、竹管条痕繊細であり、隆線が伴うことが少い」とした。一方、諸磯b式については「比較的厚手で、縄紋比較的少く、文様多く特に隆線紋を伴うことがある。器形は口頸部の内湾した、中期土器に近似した例が少くない」としている。

### 1-2. 諸磯式の細分

諸磯a式は現在、2～3段階に細分されている。諸磯a式の範囲であるが、1951年、江坂輝弥は諸磯式を水子→矢上→四枚畑→草花の4段階に細分した（江坂1951a; b）。水子式は黒浜式と諸磯a式の間に置かれた。江坂は横浜市港北区表谷貝塚の貝層下住居址などいくつ

かの遺跡で繊維を含む土器と含まない土器が伴出し、その繊維を含む土器は半截竹管文など新しい要素が認められるとして、両者を一括して「水子式」とした。現在では、この水子式は諸磯 a 式の古い段階に含めるという位置づけとなっている（早坂1993, 鈴木1994）。

一方、諸磯 b 式は様々な研究者により細分研究が行われてきた。諸磯式の細分研究の中でも諸磯 b 式に関する研究が早くから始められた。栗原文蔵は埼玉県中川貝塚の発掘から諸磯 b 式を 2 細分した（栗原1961）。西村正衛は茨城県浮島貝塚の発掘成果から細分した浮島式との共伴関係から同様に諸磯 b 式を 2 細分した。詳細については和田哲がまとめている（和田1996）。中島宏は埼玉県金堀沢遺跡・東光寺裏遺跡の発掘調査を行い、栗原と同様に諸磯 b 式を古い部分と新しい部分に細分した（中島1977; 1980）。

1979年、鈴木徳雄は『白石城』の中で稲田孝司が示した文様形態の分類に基づき、諸磯式の変遷を論じ、諸磯 a 式を 2 段階、諸磯 b 式を 3 段階に細分した。このとき、「タテ区画の崩壊」原理を論じ、それによって諸磯 a 式を細分している。この「タテ区画の崩壊」原理はそれ以降の諸磯 a 式の細分のひとつの基準となった。諸磯 b 式については、爪形文、平行沈線文、浮線文の 3 つの施文手法がみられるが、描かれる文様はこれらの施文手法にかかわらず描かれるとし、諸磯 b 式の平行沈線文土器の文様変遷から諸磯 b 式を古段階、中段階、新段階の 3 段階の変遷を示した（鈴木1979）。

1980年、今村啓爾は神津島上の山遺跡と三宅島西原遺跡の分析を通じて諸磯 b 式、c 式の変遷と細分を論じ（今村1980）、翌年には諸磯式土器の施文順序と工程に着目し、諸磯 b 式から十三菩提式までの編年案を示した（今村1981）。さらに今村は1982年に諸磯 a 式から諸磯 c 式までの変遷を示した（今村1982）。今村は鈴木徳雄の細別段階の名称にそろえたとしている。また、鷺沼遺跡 3 号住出土土器を提示し、浮線紋の出現は b 式古段階としたが、その発生源については言及しなかった。

1980年、埼玉県足利遺跡に調査成果をもとに、鈴木敏昭は b 式を b 1、b 2（古）、b 2（新）、b 3 の 4 細分を示した（鈴木1980）。b 2（古）の段階より浮線紋が出現するとしている。また、b 1 に見られる浮線紋は「原浮線文」としている（鈴木1991）。白石浩之は1983年、細田遺跡の調査成果をもとに諸磯 b 式を 3 細分した（白石1983）。そして b 式成立時に浮線文が出現するとした。

ほかに羽生淳子や谷口康浩による編年研究がある。羽生は諸磯 b 式を 3 細分している。そして、浮線文土器は

中段階以降に位置付けている（羽生1983; 1987）。谷口は諸磯式を a 式 3 細分、b 式 4 細分、c 式 2 細分の計 9 細分を示した。諸磯 b 式に関しては 4 段階の変遷を示し、そして中段階において浮線文土器が出現するとした（谷口1989）。

松田光太郎は群馬県愛宕山遺跡の報告書の中で、文様のセリエーションから諸磯 b 式を 8 段階に細分したが、その後に 5 段階へと修正している（松田1994; 2008）。

1999年に行われたシンポジウム『第12回縄文セミナー 前期後半の再検討』において各地域の前期後半の土器型式が再検討された。諸磯式については群馬県を関根慎二、埼玉県を細田勝、長野県については金井正三による発表があった。また、資料を用意してのコメントではあるが、神奈川県を松田光太郎、山梨県を今福利恵がまとめた。このように各地域の諸磯式の細分案が発表され、b 式においては凡 5 段階の区分にまとまった。

各細分案の対応関係については第 1 表にまとめた。より詳細な各細分案の内容や差異については関根慎二と早坂広人によりまとめられている（関根2011, 早坂2016）。そして、詳細部分に違いが見られることはあるが、おおよそその変遷の流れは一致していることが羽生淳子により指摘されている（羽生1987）。いずれの細分案も鈴木徳雄によって示された、諸磯 a 式土器に見られるタテ区画の崩壊、文様帯区画への木葉文の癒着による諸磯 b 式土器の成立から渦巻文の生成（鈴木1979）という変遷観から外れるものではない。しかしながら、浮線紋の発生時期や消失時期に関してなどといった、詳細部分の差異は地域差、もしくは方法論の違いに起因するものである。

### 1-3. 諸磯式の地域性について

山内清男は、『先史土器図譜』（山内1939）において諸磯 b 式土器の典型例として横浜市折本貝塚出土の土器を 2 点提示している。一方は浮線紋によって渦巻文が描かれており、他方には平行沈線紋によって鋸歯状文が描かれていた。当時は地域差と認識されていなかったが、埼玉県や群馬県において資料が増加していくに伴い地域差として認識されるようになっていく。

安孫子昭二は小山田遺跡の報文中で、ヘラ状工具による刺突文がこの地域の諸磯 b 式では見られることを指摘した（安孫子1983）。また、大坪宜雄は浮線紋に対して平行沈線紋の圧倒的な卓越を川島谷遺跡の報文で指摘した（大坪1984）。羽生淳子は諸磯 b 式を 3 段階に細別し、セリエーションの結果から 2 段階で盛行する浮線文が南関東では北関東に比べて少なく、代わりに平行沈線文が多いことを指摘している（前述1987）。

このように、この地域において特異な地域性あることが指摘されている。このような地域性に対し、中西充はT.N.No.406遺跡報文において地域を踏まえた土器論が必要であるとした（中西1986）。

可児通宏は撚糸紋を地紋に持つ土器や貝殻背圧痕紋を持つ土器などを多摩丘陵独自の諸磯b式土器とし、これらの土器群を「局地分布型」とした。一方で、諸磯b式土器分布圏全般でみられるものを「広域分布型」として、これらの分布の広がりから縄文人の生活領域の復元を試みた（可児1991）。可児は「広域分布型」について、装飾的な土器が多く、広域に分布するもので、各集団が競って製作したために広域に分布するか、交易などの対象となったために広域に分布するという2つのケースを想定している。対して、「局地分布型」とは簡単な地紋のみで飾られ、作りも粗雑で、一般的には粗製土器と呼ばれるものが多いとしている。そして可児は「局地分布型」の土器は粗製の土器であるため交易の対象となりにくく、土器製作者と土器使用者とが同じであり、その分布域の狭さから土器製作者は極めて限られた存在であったとしている。そして、「局地分布型」の土器の分布は土器製作者であり土器使用者でもあった人々の生活領域を示すものと想定されるものであるとしている。

岩橋陽一らは多摩ニュータウン地域から出土する諸磯b式土器をA～Kの11の類型に分類し、4段階に細分した（岩橋ほか1992）。その方法としては、型式学的方法に遺物包含層の状況を加味し、段階を設定するというものであった。また、諸磯b式土器を木葉文にその系譜を求めることのできる「木の葉文系土器」とし、系譜を求めることのできないものを「非木の葉文系土器」とした。「非木の葉文系土器」は内陸部では諸磯b式土器の組成に組み込まれない土器群であり、1～2段階までは内陸部の遺跡から出土する諸磯b式土器の組成と大き

な差はないが、3段階以降地域差が顕在化していくとした。この「非木の葉文系土器」は東京でも多摩川流域、特に多摩丘陵を中心に分布するとしている。そして、この地域においては浮線紋の盛行する時期はなかったとした。松田光太郎は多摩川をはさんだ対岸にあたる神奈川県においても多摩ニュータウン遺跡群の諸磯式土器と同じような傾向があると指摘している（松田1997）。

2. 問題点と目的

現在、縄文時代前期後葉における土器研究は資料数の豊富な北関東を中心に進められている。第29回縄文セミナーでは前期後半の型式間交渉をテーマに行われたが、東京や神奈川といった南西関東についての報告はなかった（縄文セミナーの会2016）。

しかしながら、南西関東において地域間交渉が見られなかったわけではないことは異系統土器の出土からも明らかである。鈴木徳雄により「中部高地交渉連鎖網」が提唱されている（鈴木1996）。北陸地域についても合わせて検討されている。そのような関係を持つ地域に対して、太平洋沿岸地域ではどのような関係が築かれているか検討する必要がある。

地域間交渉について検討するためには、その型式の持つ要素を把握しなければならない。そのために太平洋沿岸地域においても遺跡数の多い多摩川流域を対象地域として、この諸磯式土器の様相を把握する必要がある。

多摩ニュータウン遺跡群における編年（岩橋ほか1992）は遺構覆土の一括資料に基づくものではなく包含層出土のものが中心となるものである。そのため、11に分類された各類型の相伴関係には再考の余地があると考えられる。

また、諸磯a式土器については今後の検討課題とされ

第1表 各細分案の対応関係

山内 (1939)	黒浜	諸磯 a 式			諸磯 b 式						
江坂 (1951)	黒浜	水子式	矢上式		四枚畑式						
栗原 (1961)					古	新					
西村					古段階		新段階				
鈴木徳 (1979、1994)	黒浜	古段階	中段階	新段階	古段階		中段階		新段階		
鈴木敏 (1980)					b 1		b 2 古	b 2 新		b 3	
今村 (1982)	黒浜	諸磯 a 式			古段階		中段階		新段階	b 末	
谷口 (1989)	黒浜	水子式	古段階	新段階	古段階	中段階		中段階	新段階		
岩橋 (1992)	黒浜	1 段階			2 段階		3 段階		4 段階		
早坂 (1993)	黒浜	古段階	中段階	新段階							
今福 (1999)	黒浜	古段階	中段階	新段階	b 1		b 2 古	b 2 中	b 2 新	b 3	b 3 新
細田 (2002)	組み合わせ鋸歯文段階		単位文段階			浮線文段階					
松田 (2008)	黒浜	古段階	新段階 古相	新段階 新相	古段階	中 1 段階		中 2 段階 前葉	中 2 段階 後葉	新段階	
関根 (2011)	黒浜	古段階	新段階		古段階		中 1 段階	中 2 段階 前葉	中 2 段階 後葉	新段階	b ~ c
近江 (2012)					b 1		b 2 古	b 2 新		b 3	

ていた。そのため、諸磯a式と諸磯b式との境界がはっきりとしないものとなっている。この時期の土器群は鈴木敏昭の指摘するように住居址覆土内の一括資料が一つの段階のセット関係を示すことが少なく、出土状況、伴出状況を加味しつつ、型式学的方法によって段階設定を行っていく必要がある（鈴木1980）。

また、この地域の特殊性が指摘されているが、そのうちのひとつとして浮線紋に対する平行沈線紋の卓越が指摘されている。その中でも「非木葉文系土器」が盛行するとされている。「非木葉文系土器」は複数の系統を含んで設定されているものである。それらを抜き出し、“類型”<sup>(1)</sup>として抽出し、それぞれの“類型”間の交渉を検討する。それによっ

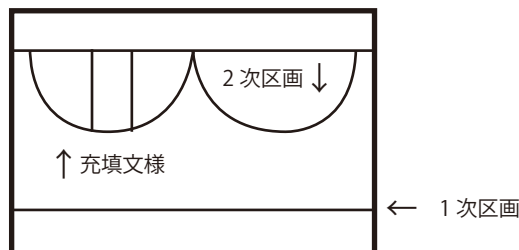
て、この地域の諸磯式と他地域の諸磯式（「木葉文系土器」）との関係性を検討する。

### 3. 土器の分類

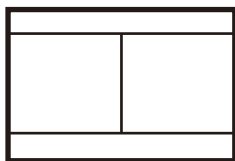
諸磯式土器の文様は「区画文」（稲田1972）とその区画内に充填するように描かれる文様で構成される。遺跡から出土した諸磯式土を「区画文」に着目し、以下のように分類した（第1図）。

稲田は文様の施文手法の変化に着目し、前期において土器の文様が「施文具形態文様」から「方位形態文様」へと変化したと説いた（稲田1976）。また、稲田はこの時、「区画文」「単位文」などの定義を示し、土器の

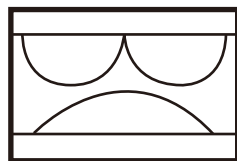
文様の部位名称



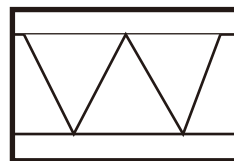
#### 第1群



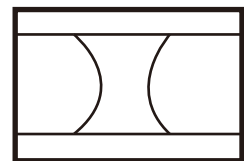
第1A類



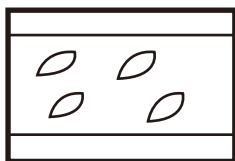
第1B類



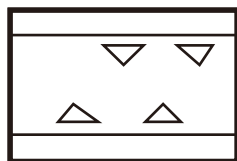
第1C類



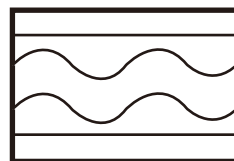
第1D類



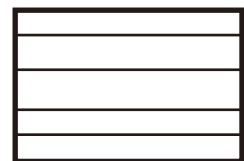
第2A類



第2B類

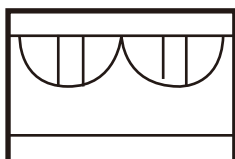


第2C類

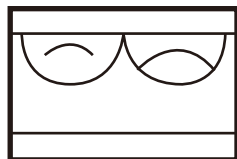


第2D類

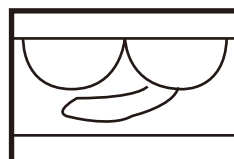
#### 区画内に施文される文様



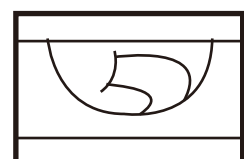
1類 短直線



2類 弧線



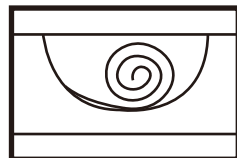
3類 短冊文



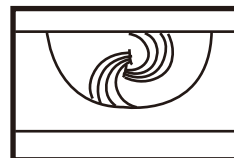
4類 蕨手文



5類 蕨手状渦巻文



6類 重渦巻文



7類 風車状渦巻文

第1図 文様の分類



文様を整理している。

第1群 口頸部に横帯区画（1次区画）をもつもの

第2類 文様帯内に2次区画をもつもの

- A 縦位の直線
- B 横位の弧線
- C 横位の鋸歯状
- D 縦位の対弧状

第2類 文様帯内に2次区画をもたないもの

- A 木葉状
- B 三角状
- C 波状
- D 横線

第3類 体部に文様帯をもつもの

第2群 口頸部に横帯区画をもたないもの

第1群第1A類は口頸部文様帯を区画する上端・下端区画を縦位の直線が連結している。

第1群第1B類と第1C類は口頸部文様帯を区画する上端・下端区画に弧線文や鋸歯状文が癒着する形となる。第1群第1A類は縦位の2次区画を連結するように肋骨文や米字文が描かれる。第1群第1B類と第1C類は2次区画の弧線文や鋸歯状文内もしくはその間を充填するように文様が描かれる。

第2A類は文様帯区画に癒着しない木葉状のモチーフ（木の葉文）が描かれる。第2B類も同様に文様帯区画に癒着しない三角形のモチーフ（三角文）が描かれる。これらのモチーフは相互に結合され、入組み状の文様を形成するものもある。第2C類は文様帯区画内に横位の波状文が描かれる。波状文は文様帯区画に癒着することはない。第2D類は文様帯区画文と区別することが困難であるが、口頸部に重畳して施文される。第2C類と第2D類は波状文と横線文が交互に描かれるものがある。

第2群は文様帯区画をもたないものである。従って、全面に縄紋もしくは撚糸紋、貝殻背圧痕紋が施文される。もしくは無文のものがある。

次に、区画内に充填施文される文様は以下のものが見られる。

- 1類 短直線
- 2類 弧線
- 3類 短冊文
- 4類 蕨手文
- 5類 蕨手状渦巻文
- 6類 重渦巻文
- 7類 風車状渦巻文

また、施文手法は大きく分けて爪形紋、平行沈線紋、浮線紋、櫛歯紋、縄紋、撚糸紋、貝殻背圧痕紋の7種がある。そして、そのうちの縄紋、撚糸紋、貝殻背圧痕紋

は地紋となるものである。

文様の表記に関してであるが、ここでは鈴木徳雄による表記（鈴木1994）にならう。「方位形態文様」（稲田1971）を文様と呼称する。また、爪形紋、浮線紋など装飾の単位となる「施文具形態」（稲田前掲）等を“紋”とし、蕨手文、渦巻文など方位形態を有するものは“文”と表記した。

## 4. 土器の変遷

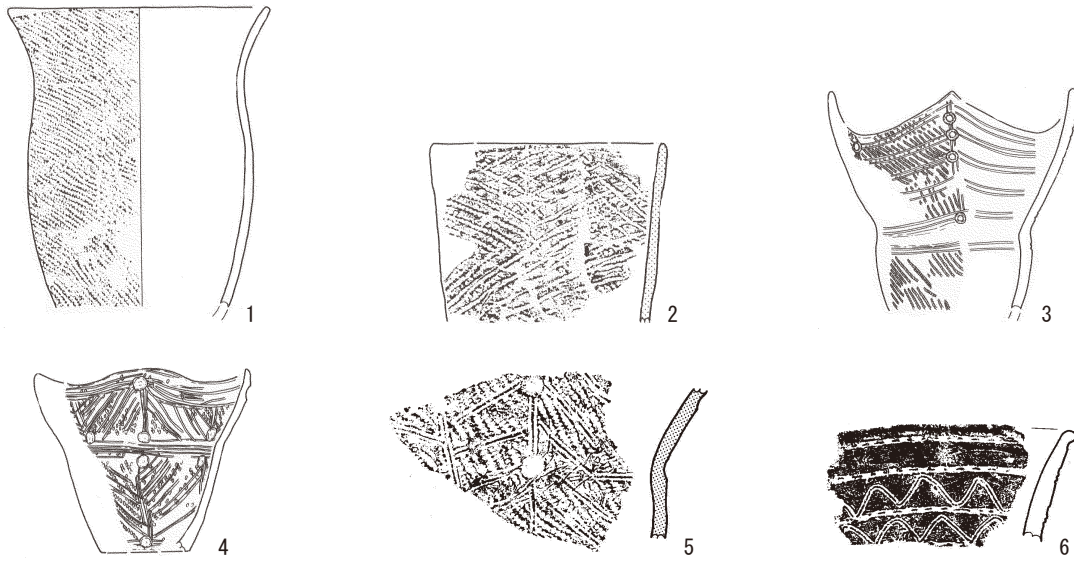
鈴木徳雄による分析（鈴木1979）を基本的な視点として木葉文の変遷をたどり、一括資料を配列する。そして、住居址での他の土器群との共伴関係を確認することによって他の土器群との併行関係を確認し、段階を設定した（第1表）。

### 4-1. 第1段階（第2図）

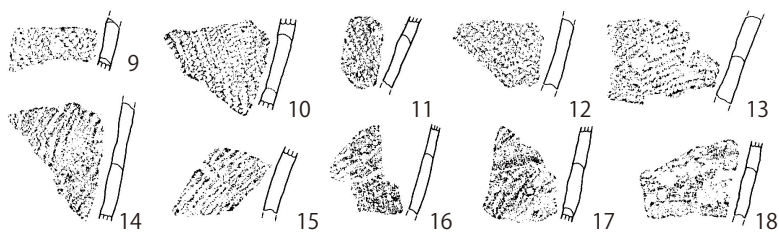
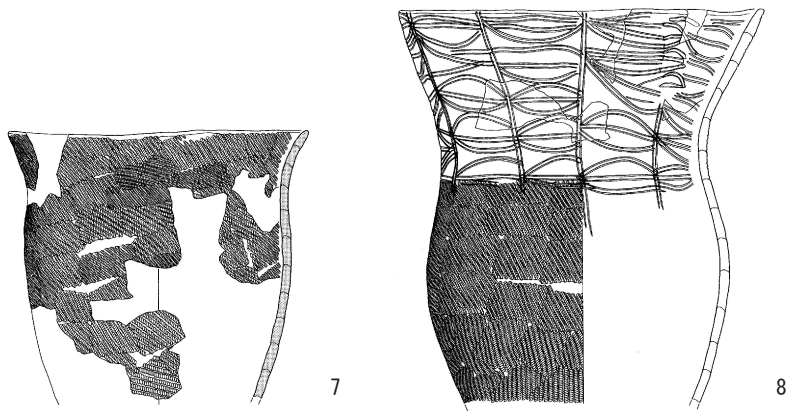
この段階は第1群第1A類および第2C・D類によって構成され、諸磯a式に比定される段階である。文様は横位の1次区画と1次区画内の縦位の2次区画を起点とした文様が描かれる。モチーフには肋骨文、米字文、波状文、横線文がある。器形は口縁部の外反する単純な器形となる。全面に縄紋を施文した繊維土器を伴う。新相になると文様帯内の2次区画であったタテ区画が崩れるようになる（鈴木1979）。諸磯b式成立前段階の諸磯a式新段階は肋骨文、米字文が縦区画の崩壊（鈴木徳雄1979）により木葉状入組文、短冊状入組文、三角文へと変化することにより成立する。しかし、縦区画は一部で残存し、葉脈状などに变化した崩れた肋骨文は少数ながらみられる（松田1993）。ほかに（鋸歯状文）、横線・波状文がある（松田1991）。いずれの文様も爪形紋、平行沈線紋により描かれる。文様帯区画には平行沈線紋や爪形紋、隆線紋が使用される。

多摩川流域において、この段階に位置づけられる住居としては、世田谷区稲荷丸北遺跡1号住とT.N.No457遺跡5号住がある。

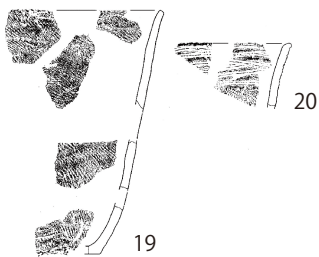
稲荷丸北遺跡1号住（第2図上段）では、無繊維土器が主体（1・3・4・6）であるが、若干の繊維土器（2・5）を含む。繊維土器は基本的に無文となるが、ごく少数文様の描かれるものがある。繊維土器の有文土器には横帯区画と縦位区画の交点を起点に斜位の直線が描かれる肋骨文（5）がある。無繊維土器のうち、有文のものは肋骨文が描かれるもの（3）、米字文が描かれるもの（4）、波状文が描かれるもの（6）がある。3は頸部が屈曲し、外反する4単位波状口縁をもつ器形である。口縁直下に上端区画、頸部に下端区画を設け、



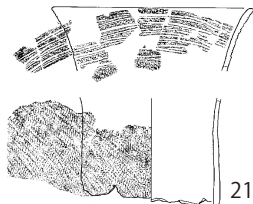
稲荷丸北遺跡 1号住出土土器



T. N. No457 遺跡 5号住出土土器



代継・富士見台遺跡 1号住出土土器



代継・富士見台遺跡 2号住出土土器

1 ~ 4、7、8、19 ~ 21 : S=1/8  
5, 6, 9 ~ 18 : S=1/4

第2図 第1段階の土器

4 単位の波状口縁に対応する縦区画が設けられる第 1 群第 1 A 類である。縦区画には、縦方向の区画線上に円形刺突、そしてそれを起点に縦区画を連結する弧線が平行沈線によって描かれる。4 は 3 に類似する器形ではあるが 3 よりも小さい波状口縁で、若干外側に開き気味の器形となっている。こちらも口縁直下に上端区画が設けられる。下端区画は胴下部に設けられ、頸部にも横帯区画が描かれる。波状口縁に対応する縦区画を設け、斜線を平行沈線によって描き、米字文を構成する第 1 群第 1 A 類の土器である。6 は口縁直下に上端区画を設ける。文様帯区画下には爪形紋の横線文と平行沈線の波状文が交互に描かれている。口縁部のみの破片であり、器形の復元はできない。

T.N.No457 遺跡 5 号住（第 2 図中段）も同様の段階に位置づけられる。繊維土器（7）と無繊維土器（8）、無繊維土器の釈迦堂 Z3 式（9～18）が共伴して出土している。繊維土器は縄文施文のみの土器（7）で文様の描かれるものはない。無繊維土器には文様の描かれる土器があり、肋骨文の描かれる土器が出土している（8）が、この個体は文様帯の上端・下端区画ともにもたない。肋骨文を構成する縦位の 2 次区画とそれを連結する弧線のみが平行沈線によって描かれている。そのほかの文様の描かれる土器は小片のみで、文様帯の下端区画が読み取れる程度である。

9～18 は釈迦堂 ZIII 式に比定されるものである。八王子市館町遺跡や T.N.No426 遺跡、T.N.No480 遺跡からも出土しているが、諸磯 a 式を伴うのは T.N.No457 遺跡 5 号住のみである。釈迦堂 ZIII 式の編年については綿田弘実による編年がある（綿田 2017）。その編年では釈迦堂 ZIII 式は黒浜式古段階前半から諸磯 a 式の古い段階までの時間幅があり、T.N.No457 遺跡 5 号住出土の釈迦堂 ZIII 式は綿田編年の 3 期にあたるものである。

この段階の新しい様相をもつ住居址としては、代継・富士見台遺跡 1 号住・2 号住（第 2 図下段）がある。いずれの住居址も稲荷丸北遺跡 1 号住、T.N.No457 遺跡 5 号住と異なり、繊維土器を伴出しない。住居から出土した資料が少なく、土器組成の全体が把握できたとは言えないが、第 2 D 類が出土している。19 は代継・富士見台遺跡 1 号住から出土した土器で、緩やかに外反する器形となっている。全面に RL の縄が施文される。20 は口縁部のみの破片資料で器形を復元することはできない。口縁部に横帯区画を設けている第 2 D 類に分類される土器である。21 も同様に口縁部に横線文が描かれる土器である。器形は 19 よりも強く外反する器形である。

他にこの段階にあたる住居址の検出された遺跡としては八王子市滝山高燥遺跡（新藤ほか 2012）がある。

#### 4-2. 第 2 段階（第 3 図）

諸磯 b 式は諸磯 a 式新段階において文様帯区画内に描かれていた文様描線が文様帯区画内に癒着することによって区画文に組み込まれていくことで成立する。しかし、諸磯 a 式段階においてみられた木の葉文が崩れ、描線の一部が横位の区画文に癒着する弧線文、鋸歯状文の他に、横帯区画に癒着しない木葉状入組文が残存する。したがって、この段階は第 1 群第 1 A・B・C 類、第 2 A・B・C・D 類によって構成される。

幅広半截竹管が施文具として使用されるようになるが、第 1 段階で使用されていた幅狭半截竹管も残存する。第 1 群第 1 C 類には多段化するものがみられる。

成瀬西遺跡 1 号住、T.N.No.457 遺跡 3 号住がこの段階に位置づけられる。成瀬西遺跡 1 号住（第 3 図上段）の 1-a と 1-b は同一個体である。口縁部の外反する鉢形の器形をとり、文様帯は 2 段構成となっている。1 次区画の横帯区画内に 2 次区画は無く、文様帯区画に接触しない波状文が描かれている。第 1 群第 2 C 類となる。

T.N.No.457 遺跡 3 号住（第 3 図下段）はこの段階がまともに出て出土している。2 は第 1 群第 1 B 類で爪形紋による横帯区画内に平行沈線による弧線が 2 次区画として描かれる。そして、2 次区画間に「止め」（鈴木敏昭 1980）をもたない短冊文が平行沈線と爪形紋によって描かれる。

3・4・7・8 は第 1 群第 1 C 類に分類される土器である。このうち、3 は文様帯が多段化し 2 段構成となっている。4・7 は多段構成ではなく、同一文様帯内であるので重層化している。8 は波状口縁の土器で、鋸歯状の 2 次区画間に鋸歯状のモチーフが重層に施文され菱形文が構成されている。菱形文内には円形刺突が施文される。3・8 は爪形紋、4・7 は平行沈線によって文様が描かれる。5 は縦区画の残存する個体で、平行沈線によって横帯区画と 2 次区画の縦区画を設け、横線文と波状文が平行沈線によって交互に描かれる。

6 は横線文が描かれる第 1 群第 2 D 類の土器である。他の個体とは異なり、2 と 6 は同様に文様帯区画内にまで縄紋が施文される。9 と 10 は第 1 群第 1 B 類に分類される土器である。9 は 2 次区画の弧線間に円形刺突や蕨手文成立直前段階と考えられる崩れた木葉文状のモチーフが充填施文されている。12 は胴部のみ残存する個体である。胴下部に稜をもち、稜の上に梯子状の浮線をもつ。また、地紋は羽状縄紋であり、関西系の土器と類似する部分がある。しかしながら、器壁は厚く在地の土器と同様に製作されたものと考えられる。13・14・15 は浅鉢である。いずれも縄紋施文のみで、胴部に稜をもつ。13 は口縁部が内屈するが、14 はまっすぐに外反す



る。15は底部のみの残存であり、胴部より上がどのような器形となっていたかは不明である。底部に2本1組の脚が3つ取り付けられているのが特徴である。前期においてこのような器形の土器は確認されていないようである。

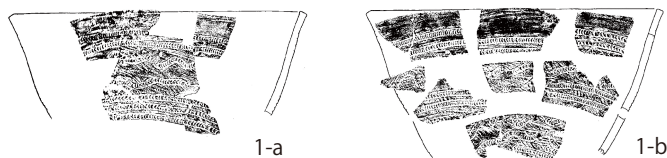
成瀬西遺跡1号住やT.N.No.457遺跡3号住では明確に区画文に描線が癒着せず、地縄紋の節はこまかい諸磯a式の様相を残した土器が出土している。短冊文や弧線文のように、諸磯a式から発生した肋骨文・木の葉文に系譜を求められる文様をもつ土器群と鋸歯状文や菱形文、タテ区画波状文といった、肋骨文・木の葉文を系譜に持たない土器群が存在する。そのうち、鋸歯状文や菱形文、波状文には文様帯が多段化するものがみられる。器形はすべて口縁の外反する器形で、波状口縁もあるが平

縁がほとんどで前段階の諸磯a式とは異なる。施文手法は幅広の爪形紋となっている。この二つではT.N.No.457遺跡3号住が新相にあたるといえる。また、T.N.No.457遺跡3号住では浅鉢も出土している。浅鉢は胴部に屈曲をもつ器形で、口縁部が内屈するものもある。そして、無文もしくは縄文施文のみとなる。

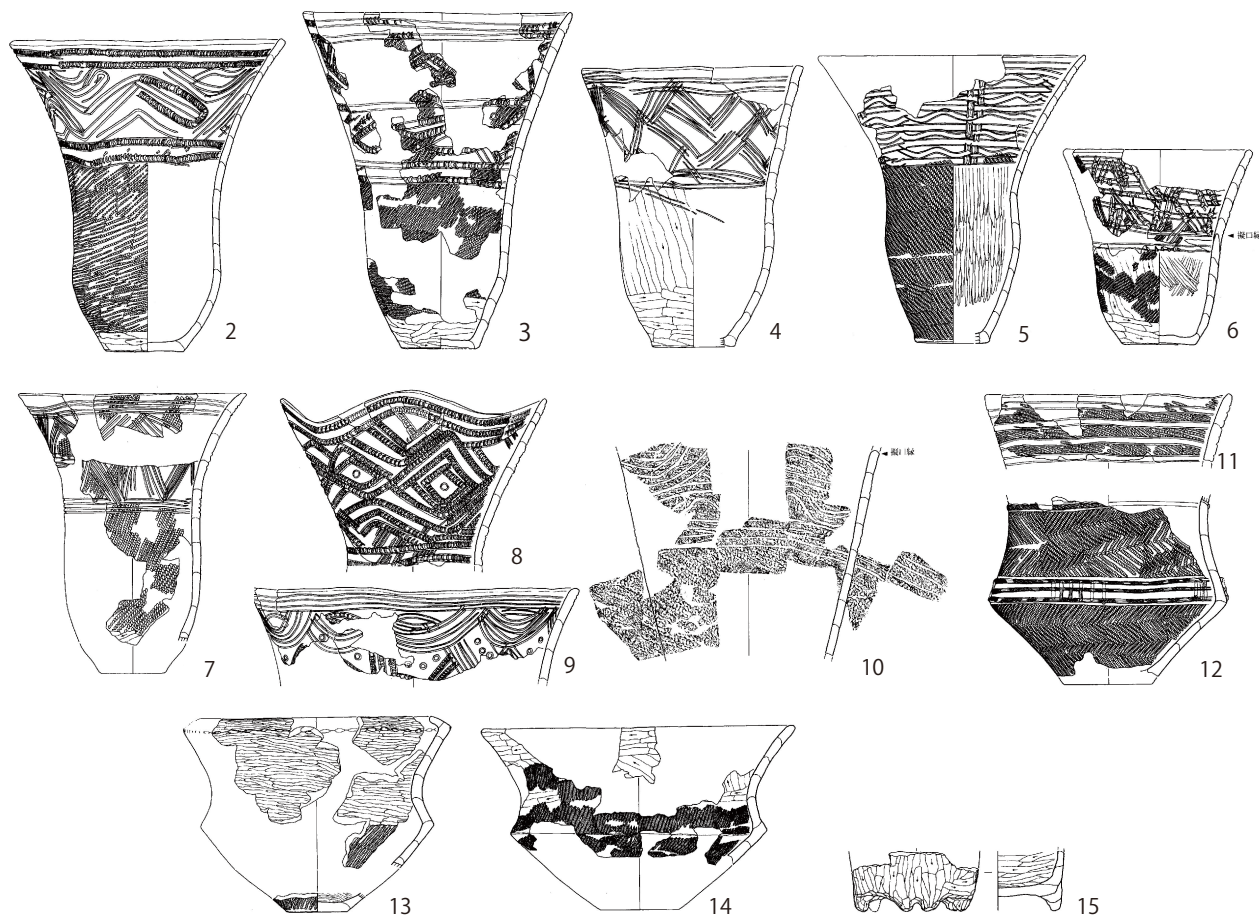
この他にこの段階の住居址としては稲城市堅台遺跡J-1号住がある（呉地ほか1996）。

#### 4-3. 第3段階（第4図）

次の第3段階は第1群第1C類では文様帯が多段化し文様帯を2帯もつものが増加する。ただし、2段目の文様帯の下端区画が施文されないことがある。前段階で文様帯の上端と下端の横帯区画文に文様帯内の文様モチー



成瀬西遺跡1号住出土土器



T. N. No. 457 遺跡3号住出土土器

1~14:S=1/8

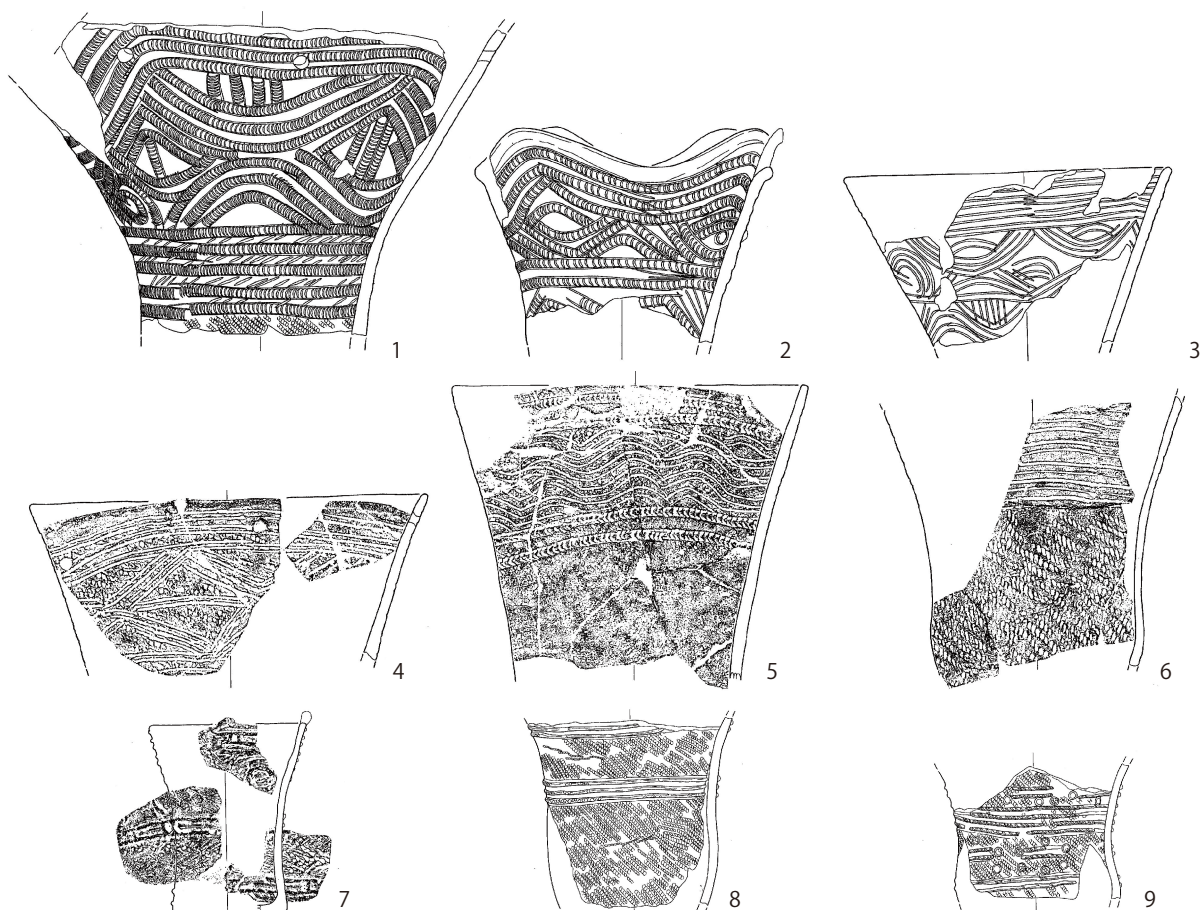
第3図 第2段階の土器



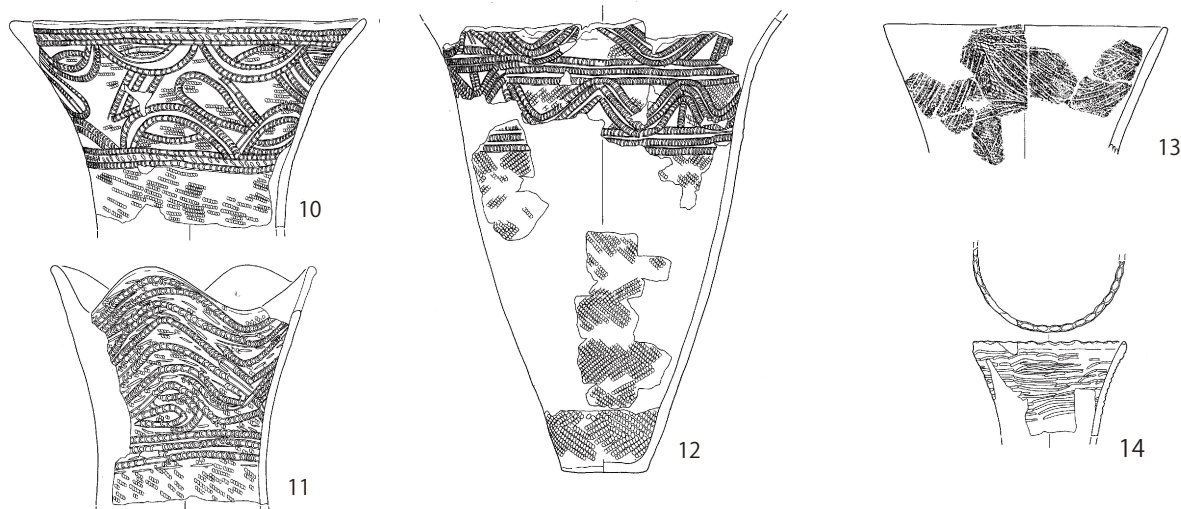
フが癒着した（鈴木1979）が、この第3段階の第1群第1B類の場合、1類、2類、4類の文様が描かれる。第1段階、第2段階でみられた第1群第2A類のポジ部分とネガ部分が反転することで4類へと変化していく。そのため4類には「止め」がある。この段階から浮線文

が文様施文に使われるようになる。また、第1群第1B類では文様帯下端区画が重畳するものがみられる。

雪ヶ谷貝塚1号住、3号住がこの段階に比定できる。1～4は第1群第1B類の土器である。1は2単位波状口縁の土器で、文様帯上端区画は4条、下端区画は5条



雪ヶ谷貝塚1号住出土土器



雪ヶ谷貝塚3号住出土土器

1~14:S=1/8

第4図 第3段階の土器

の爪形紋による横帯区画となっている。文様帯内には弧線による2次区画が設けられ、短直線もしくは蕨手文が2次区画内を充填するように施文されている。2は4単位の波状口縁をもち、横位区画は多段化している。爪形紋によって1次区画の横帯区画と2次区画の弧線が描かれ、内部にも弧線が充填施文される。3は平行沈線によって1次の横帯区画、2次の弧線による区画が設けられ、2次区画内には弧線と縦方向の短直線、「止め」をもつ蕨手文が充填施文される。4は第1群第1C類に分類される。多段構成で、鋸歯状の2次区画が平行沈線によって描かれる。5は第1群第2C類に分類される土器で、爪形紋によって横帯区画が設けられ、文様帯内には区画線の接触しない平行沈線による波状文が描かれる。6は第1群第2D類に分類される土器で、平行沈線によって横線文が描かれる。7～9は文様構成の全体が把握できないが、浮線紋が使用される土器である。9は口縁部と頸部、胴下部に梯子状浮線による横帯区画がみられる。8は浮線によりおそらく文様帯下端区画と頸部に区画線が描かれる。9は頸部と胴下部のふくらみの部分に横帯区画が設けられ、その区画内には横方向の区画線に接触しない短直線が浮線により描かれている。また、円形刺突もみられる。

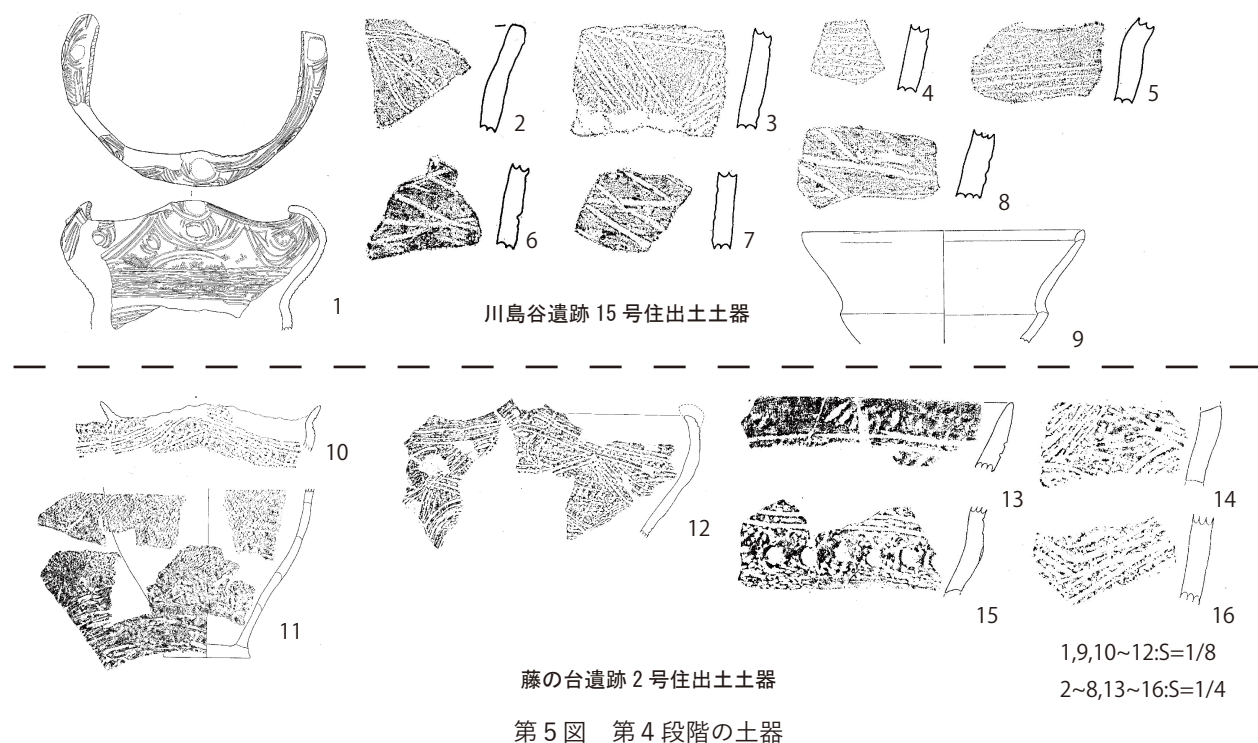
3号住（第4図下段）も同様の段階に位置づけられる。10～12、14は第1群第1B類に分類される。10は爪形紋による1次の横帯区画と弧線の2次区画があり、2次区画内には弧線が充填される。また、2次区画外に

は「止め」をもつ短冊文と長く伸びた木葉文が描かれる。11は4単位の波状口縁をもち、爪形紋で1次区画に接触しない波状文が描かれ、その間にできたスペースに蕨手文が描かれる。12は多段構成をとり、1段目、2段目ともに2次区画の弧線を持つ。弧線内には縦方向の区画線に接する直線が描かれる。14も平行沈線により1次の横帯区画と2次の弧線による区画を持つ。13は第2群第1C類に分類され、文様帯区画をもたず、単沈線により横方向の短直線が複数描かれる。

#### 4-4. 第4段階（第5図）

キャリパー形の器形が成立し、第1群第1B・C類、第2D類によって構成される。この段階が第4段階に当たる。第1群第1B類においても文様帯が2段になる。第1群第1C類はさらに多段化が進み、文様帯が2段以上になる。また、第1群第1C類は口縁が外反する伝統的な朝顔形の器形とキャリパー形の器形が存在する。

前段階で成立した充填文様4類は5類へ変化していくが、4類の蕨手の先端の「止め」（鈴木敏昭1980）は残存する。この渦巻化した蕨手状モチーフである5類は2条から多いものでは5条の浮線文または平行沈線文によって描かれるようになる。この段階になると爪形文は衰える。この段階の爪形文は浮線文や平行沈線文で文様の描かれる土器の一部に施文されているケースがある。器形がキャリパー形となり、4単位の波状口縁の波頂部には獣面把手、もしくは突起がつけられるものがある。





川島谷遺跡群第2地点15号住（第5図上段）がこの段階に位置づけられる。1は4単位波状口縁のキャリパー形の器形で、平行沈線で口縁部文様帯に2次区画文となる弧線文が描かれ、その内部に渦巻文が充填施文される。波頂部には突起の付いていた痕跡が残る。それに伴い、胴部に屈曲をもつ無文の浅鉢が出土している（9）。また、小破片ではあるが、平行沈線により鋸歯状文の描かれるものと横線文が描かれるものが出土している（2～8）。

藤の台遺跡2号住（第5図下段）もこの段階に位置づけられるものである。12は4単位波状口縁のキャリパー形の器形を取り、波頂部には獣面把手に類似する突起が取り付けられる。口頸部文様帯は平行沈線によって区画され、鋸歯状文による二次区画の後、その間に弧線文が充填するように施文される。このほかの土器も平行沈線によって、横帯区画がなされ、弧線文もしくは鋸歯状文によって2次区画がなされる土器である。

また、T.N.No753遺跡では、遺構外ではあるがこの段階の良好な資料が出土している。

#### 4-5. 第5段階（第6図）

第1群第1B類では、キャリパー形の土器の口縁部の内屈により従来、頸部文様帯であったものが内屈部分を境に分割されるようになる。第1群第1B類の口縁部の二つの文様帯に6類の重渦巻文が描かれる。重渦巻文は前段階でみられた「止め」のある蕨手状のモチーフ（5類）がさらに渦を巻くようになり成立する。

第1C類は前段階で2つの器形が発生したが、キャリパー形の第1C類では、鋸歯状のモチーフを重ねることによってできる三角形もしくは菱形の区画に「止め」をもたない4類を充填するものが現れる。これらには口縁部に突起が取り付けられるものがある。この場合、文様の単位数とは無関係に4類が描かれる。

この段階の浮線文の断面は前段階の楕円形に近い形からさらに平たい形となる。また、2～4条の浮線、平行沈線によって文様が描かれるようになり、より文様帯内に文様が充填されるようになる。

この段階の資料の出土している遺構としては三矢田遺跡6号住・10号竪穴状遺構・上池上遺跡2号住、T.N.No.30遺跡1号住がある。

三矢田遺跡6号住出土の土器（第6図上段、1）は4類の充填施文される第1群第1C類である。口縁部の内屈するキャリパー形の器形となっている。4類の描かれる範囲は口縁部のみで、それより下の文様帯には描かれていない。

10号竪穴状遺構出土の土器（第6図中段）の大半が

第1群第1C類となっている。文様帯はすべての土器で2段以上の構成となっている。2～5は第1群第1C類に分類される。鋸歯状区画と鋸歯状区画によって生まれる三角形の区画内に蕨手文を充填するものがみられる。いずれも1条から2条の平行沈線によって描かれている。器形は口縁部の内屈するものとししないものがあり、それぞれ波状縁（2、3、5）のものと平縁（4）のものがある。4は口縁部の内屈する波状縁の波頂部にはボタン状の貼付け文が見られる。また、3のように胴部に屈曲をもつ器形やバケツ形の器形といった諸磯b式で古い段階から見られる器形も存在しているが、いずれも第1群第1C類に分類されるものである。第1群第1C類のほか、明確な文様帯・文様モチーフをもたない刺突文土器（第2群第1C類）がある。また、ごく少数であるが、第1群第1B類もみられる。

上池上遺跡2号住（第6図中段）では重渦巻文の充填施文される第1群第1B類と第1C類が出土している。6、7は第1群第1B類で、外反しながら立ち上がり、口縁部の内屈するキャリパー形の器形をとる。浮線による1次の横帯区画の後、弧線による2次区画が設けられ、重渦巻文や弧線が区画内外に描かれる。8は第1群第1C類で、緩やかな頸部のくびれをもつ4単位の波状口縁のキャリパー形の器形をとる。

T.N.No30遺跡1号住（第6図下段）もこの段階に位置づけられる。器形の復元できる個体は少なく、第1群第1C類に分類される土器と、第1群第2D類の横線文のみ描かれる土器が主体で、渦巻文系統の土器に分別されるものはない。唯一、器形の復元できた個体は2の土器で、口縁部が若干内湾する大型の鉢形の器形で、横線文が平行沈線で描かれ、第1群第2D類に分類される。類似する土器が神奈川県大井町矢頭遺跡2号住と神奈川県横浜市舞岡リサーチパーク遺跡1号住から出土している。神奈川県大井町矢頭遺跡2号住出土の土器は中2段階前半に位置づけられ、器形は類似してはいるが、描かれる文様は鋸歯状文となっている（西川・天野1997）。また、神奈川県横浜市舞岡リサーチパーク遺跡1号住から出土したものは、ゆるやかに外反しながら立ち上り、口縁部がゆるく内湾する器形で横線文が描かれる（土肥ほか1993）。この土器の類似性からT.N.No.30遺跡1号住も同様の段階に位置づけられる。

また、T.N.No30遺跡1号住からは関西系の深鉢も出土している（9-a～9-d）。この土器は、胴部下半で膨らみ、胴部半ばでくびれたのちに緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁部が内屈するキャリパー形の器形を取る。地紋の羽状縄文の結束部に文様帯横帯区画の梯子状浮線・八の字状の刻みをもつ浮線が貼り付けられる。

口縁部文様帯は残存状態がよくないため不明瞭ではあるが、梯子状浮線によってモチーフが描かれている。口唇部には凡の字状の意匠が描かれる。II c 式のなかでも新しい部分に位置づけられる資料であろう。

#### 4-6. 第6段階 (第7図)

第1群第1B類の土器では体部に文様帯が設けられるようになる。口縁部の文様帯には7類が描かれ、体部の文様帯には7類のほかX字状の文様も描かれていること

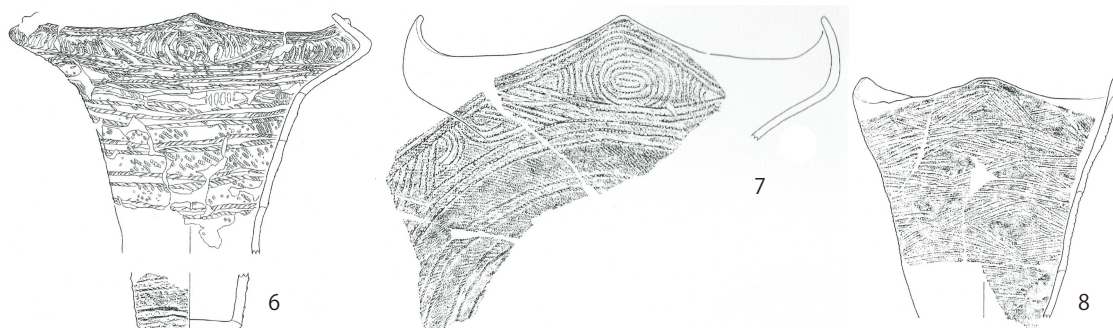
がある。7類は渦を巻く「止め」をもった蕨手状のモチーフ2つが組み合わさることによって構成されている。

第6段階になると浮線紋は次第に繊細になっていく。浮線紋、平行沈線紋がともに繊細になり、数条束で文様を描く。浮線には鋭い刻み、刺突、節の細かな縄文が施される。そして、数条の浮線文の間に浮線上に施される刺突と同様の丸棒状工具による刺突文列や有節平行沈線文をもつものがみられるようになる。平行沈線紋も同様に繊細になり、数条束で文様を描くようになる。

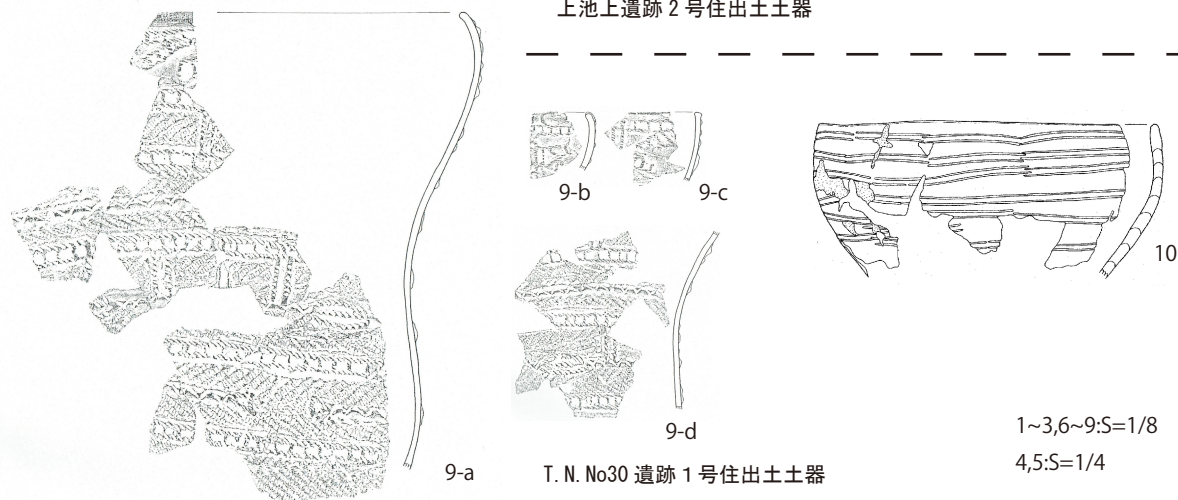


三矢田遺跡 6号住出土土器

三矢田遺跡 10号竪穴状遺構出土土器



上池上遺跡 2号住出土土器



T. N. No30 遺跡 1号住出土土器

1~3, 6~9: S=1/8

4, 5: S=1/4

第6図 第5段階の土器

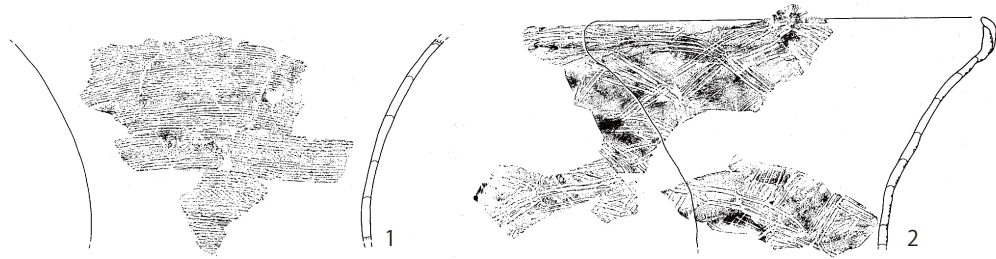


この段階に位置づけられる住居址としては、三矢田遺跡7号住や上池上遺跡1号住がある。

三矢田遺跡7号住（第7図上段）では、第1群第2D類と第1群第1C類が見られる。1は第1群第2D類の土器で、口縁部が欠損しているものの、キャリパー形の器形となると考えられる。集合条線化した平行沈線によって横線文が描かれる。2は第1群第1C類の土器で、平縁のキャリパー形の器形に平行沈線によって1次の横帯区画と2次の鋸歯状の区画が描かれる。文様帯は多段

構成をとる。第1群第2D類の中には“靴先状口縁”となり、波頂部にボタン状の貼付けをもつ土器もみられる。また、口縁部の幅の狭い文様帯に平行沈線によって、縦方向の短直線を描く土器が存在する。口縁部が短く内屈する無文の浅鉢も出土している。

上池上遺跡1号住（第7図下段）では第1B類、第1C類がまとまって出土している。第1B類では体部文様帯が発達しており、体部文様帯が2段になっているものもある。口縁部の内屈するキャリパー形の器形の第1群



三矢田遺跡7号住出土土器



上池上遺跡1号住出土土器

1~12:S=1/8

第7図 第6段階の土器

第1 B類や第1 C類、第2 D類がみられる。第1群第1 B類に分類される土器は3、4、5、6がある。3は器形が4単位の波状口縁のキャリバー形の土器で浮線による1次の横帯区画によって口縁部の文様帯と胴部の文様帯が形成される。口縁部文様帯は弧線による2次区画があり、内部には風車状渦巻文が描かれる。胴部文様帯は鋸歯状の区画を持ち、その内部に風車状渦巻文が描かれる。4は口縁部が残存していないが、3と類似する器形になるものと考えられる。胴部文様帯が多段化しており、1段目、2段目ともに弧線の2次区画と風車状渦巻文が見られる。

5、6はどちらかも口縁部のみの破片資料である。どちらも波状口縁となっている。6は波頂部に貼付けをもつ。文様は5、6どちらも横帯区画の後、弧線による2次区画が設けられ、風車状渦巻文が描かれる。7、8、11は第1群第1 C類に分類される。いずれも4単位の波状口縁のキャリバー形の器形である。また、この3個体はすべて多段構成をとるが、平行沈線が集合沈線化し、横帯区画をはっきりとしない。6と10は第2群第1 D類に分類され、平行沈線によって文様が描かれているが横帯区画が見られず、モチーフも不明なものである。12は第2群第2類で無文の土器である。

#### 4-7. 第7段階 (第8図)

第7段階になると、第1群第1 C類は文様帯の幅が狭くなり、7類の文様帯区画への接触する面が増加し、区画文化する。その結果、第1群第1 D類となる。ただし、非常に小型の渦巻文が残存するものもある。また、この段階では第1群第2 D類が顕著にみられるようになる。第1群第1 C類では前段階まででみられたような区画内への蕨手文の充填は見られなくなる。

また、浮線紋は減少し、平行沈線紋が中心となってくる。この段階の平行沈線紋は従来の平行沈線紋よりも幅が狭いもので、集合条線のようにになっている。文様帯区

画が集合条線化した結果、文様帯区画が不明瞭になる。また、口縁部にボタン状貼付文がみられるようになる。ボタン状貼付けや矢羽根状のモチーフは諸磯c式にもみられるものである。しかしながら、胴部の文様帯が縦方向ではなく、横方向に展開されるものであるので、諸磯c式成立直前段階の様相をもつものと理解できる。

半蔵窪遺跡1号住はこの段階に位置づけられる。1は第1群第1 C類に分類される。外反しながらまっすぐに立ち上がる器形となる。口縁部には4単位の貼付け文が見られる。文様帯は多段構成となっていて、集合条線によって1次の横帯区画と矢羽根状に近い鋸歯状の2次区画が描かれる。2、4は第2群の第2類と第1 D類である。3は第1群第2 D類に分類され、浮線の残存する例である。2条1組の浮線により横線文が描かれる。

そのほかには多摩市和田西遺跡1840号遺構があげられる。他の段階の土器が混ざり、一括性は高くないが、この段階の土器がまとまって出土している。第9図20の土器がこの遺構出土の土器である。深鉢の口縁部分で、波頂部である。屈曲した口縁部の内側に入り込んだ部分には7類の風車状渦巻文が描かれ、外側には条線で縦位の矢羽根のモチーフが描かれる。第1群第1 B類だが、第1 D類に近い土器である。

以上の各段階の様相をまとめると

##### 第1段階 (諸磯a式)

文様帯：第1 A類、第2 C・D類

充填文様：充填されない

施文具：爪形紋、平行沈線紋、櫛歯紋

##### 第2段階 (諸磯b式古段階)

文様帯：第1 A・B・C類、第2 A・B・C・D類

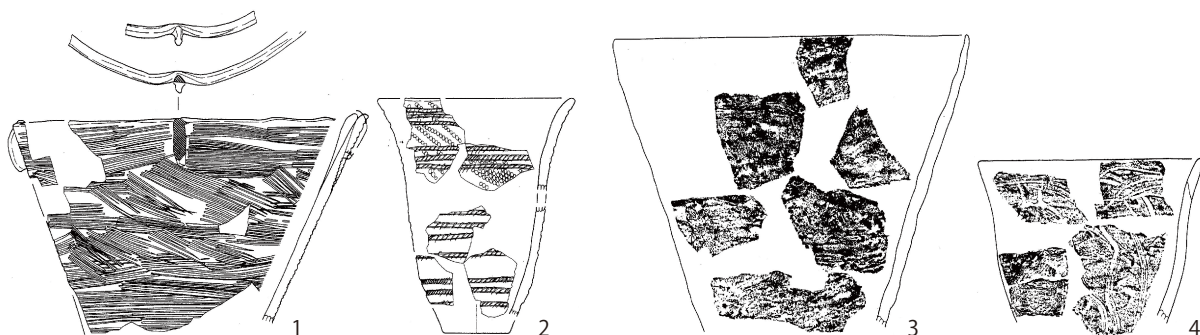
充填文様：1類、2類、3類

施文具：爪形紋、平行沈線紋、浮線紋

##### 第3段階 (諸磯b式古段階)

文様帯：第1 B・C類、第2 C・D類

充填文様：1類、2類、4類



半蔵窪遺跡1号住出土土器

1~4:S=1/8

第8図 第7段階の土器



施文具：爪形紋、平行沈線紋、浮線紋  
 第4段階（諸磯b式中1段階）  
 文様帯：第1B・C類、第2D類  
 充填文様：1類、2類、5類  
 施文具：爪形紋、平行沈線紋、浮線紋  
 第5段階（諸磯b式中2段階前半）  
 文様帯：第1B・C類、第2D類  
 充填文様：1類、2類、6類  
 施文具：平行沈線紋、浮線紋  
 第6段階（諸磯b式中2段階後半）  
 文様帯：第1B・C類、第2D類、第3類  
 充填文様：1類、2類、7類  
 施文具：平行沈線紋、浮線紋  
 第7段階（諸磯b式新段階）  
 文様帯：第1C・D類、第2D類、第3類  
 充填文様：充填されない  
 施文具：平行沈線紋  
 となる。カッコ内には松田編年（松田2008）との対応  
 関係を示した。また、第9図に編年表を示した。

## 5. “類型”の設定

第1B類は全段階を通して1類～7類が充填される。3～7類は系統的に独立した変遷をたどることのできるものであるから、この第1B類は仮称“蕨手文・渦巻文類型”とすることが出来る。対して、第1C類は鋸歯状の区画をすべての段階を通して維持しており、こちらも独立した変遷が捉えられるので仮称“鋸歯状文類型”として捉えられる。この“鋸歯状文類型”は先行研究として示したようにこの地域の地域性として指摘されてきた部分である。

“蕨手・渦巻文類型”は、平行沈線紋もしくは爪形紋、浮線紋によって木葉文の系統上に位置づけられる文様が描かれる系統であり、この系統の変遷については鈴木徳雄の論考（鈴木1979）以降、多数の変遷案が提唱されている。すなわち、示準的な“類型”である。対して、この地域の土器組成の一端を担っている“鋸歯状文類型”については岩橋らによって検討されているが、その他でこの“類型”を扱ったものはなく、その成立、変遷についても浮島式の影響によるとされる場合もあり、その編年観は一致していない。

## 6. 諸磯a式の変遷と地域性

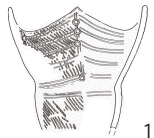



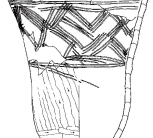
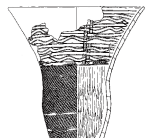










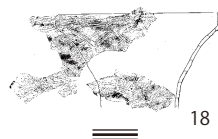

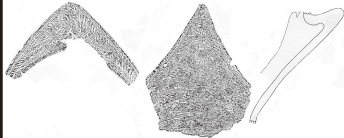
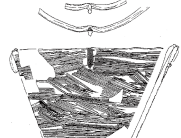
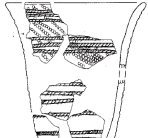
この地域は遺構から出土する諸磯a式新段階のメルクマールとされる木葉文の描かれる土器が極めて少ないの

が特徴である。この地域のこの段階の特徴として、鈴木編年や松田編年などにあるような諸磯a式の新段階と新段階を明確に分離することが難しい。また、諸磯a式から諸磯b式にかけての出土した木葉文の描かれる土器の変遷は内陸部と異なり、区画文と分離したまま残存することがすでに鈴木徳雄により指摘されている（鈴木1996）。この時期の地域差の生成は東関東における浮島式の分離と時期を同じくするものであるが、その後の変遷については「南関東では再び内陸部と連動するような交渉関係の再編成の方向性」をもって変遷していくとしている（鈴木前掲）。しかしながら、諸磯b式期になっても、出土土器の組成の主体を占めているのは“鋸歯状文類型”であり、“蕨手・渦巻文類型”は主体とならない。これは内陸部とは全く異なる様相である。したがって、諸磯a式の後半においてこの時に生まれた地域差が諸磯a式における、すでに先行研究で指摘されてきたような地域差につながっていくと考えられる。

## 7. “類型”の変遷と分布

諸磯b式においてみられる鋸歯状文は、諸磯a式において存在した波状文や鋸歯状文が渦巻文系統における変化と同様に文様帯区画文に癒着することによって成立する。この時、波状文の施文される土器には波状文・横線文が交互に描かれるような土器があり、このような土器に癒着していくことから、第2段階・第3段階において、“蕨手・渦巻文類型”に先行して“鋸歯状文類型”で文様帯の多段化が起こると考えられる。そのようにして、鋸歯状文は次第に多段化していく。数は少なくなるが複合化するもの、重層化するものも存在する<sup>(2)</sup>。第2段階は、基本は単段構成で、弧線と組み合わせられたもの、重層化し菱形を構成するものも存在する。第3段階になると蕨手文・渦巻文類型に先行して多段構成のものが見られるようになる。第4段階以降は渦巻文系と同様の文様帯の変化をたどっていく。第4段階では文様帯が3段構成のものなどがみられる。第5段階になると、鋸歯状文によって生まれた三角形の区画内に蕨手状のモチーフを充填施文する土器が出現する。蕨手状のモチーフが充填施文される土器は口縁部が内湾する器形をとる。また、口縁部は平縁であるが、4単位の突起が取り付けられるものがある。蕨手状のモチーフが充填施文されない土器は胴部から口縁部まで直立する円筒形の器形から変化しない。第7段階になると、この地域では横線文が描かれる土器が主体となり、“鋸歯状文類型”は減少する。

この“鋸歯状文類型”は浮島式との関係性とその文様や器形から想起されるところである<sup>(3)</sup>が、この“鋸歯状

		蕨手文・渦巻文	鋸歯状文	波状文・横線文
第1段階	諸磯a式	 1	 2	 3
第2段階	諸磯b古	 4	 5	 6
第3段階	諸磯b古	 7	 8	 9
第4段階	諸磯b中1	 10	 11	 12
第5段階	諸磯b中2	 13	 14	 15
第6段階	諸磯b中2	 17	 18	 19
第7段階	諸磯b新	 20	 21	 22

第9図 多摩川流域諸磯式編年表



文類型”は諸磯b式の最も古い部分よりみられるものであり、系統的に変遷をたどることが出来る。第2段階に併行する浮島式はまだ鋸歯状文をもつ段階<sup>(4)</sup>ではない。また、浮島式、諸磯式ともに文様帯を横位に分帯する文様構成が基本となる<sup>(5)</sup>が、多段構成は諸磯式独自のもので浮島式では見られない。独自に系統をたどることが出来、独自の文様構成をとるため、この“鋸歯状文類型”は諸磯式内部で独自に変遷していく“類型”であり、浮島式の影響を受け成立しているものではないと言える<sup>(6)</sup>。

「木葉文系土器」は浮線紋や平行沈線紋によって木の葉文から系統をたどることのできる文様すなわち渦巻文の描かれる土器群を指す。「非木の葉文系土器」はそれ以外、すなわち鋸歯状文の描かれる土器群を指している。「非木の葉文系土器」の“鋸歯状文類型”は分布の中心を多摩丘陵に持つことが岩橋により指摘されている。この“鋸歯状文類型”の分布は諸磯式土器分布圏の内、静岡県東部までの太平洋沿岸地域に分布している。例えば、静岡県東伊豆町中峯遺跡（勝又1997）では縄文時代前期の包含層からまともに諸磯b式が出土しているが、その大半が平行沈線によって描かれる“鋸歯状文類型”である。他にも、山梨県東八代郡御坂町・八代町花鳥山遺跡4号住などからも出土している。

内陸部と沿岸部どちらでも出土する“蕨手・渦巻文類型”は可児通宏の「広域分布型」土器群にあたるものである。対して、鋸歯状文類型は一定の分布範囲を有するものであるが、“蕨手・渦巻文類型”と比較して分布圏は狭いものである。しかしながら“鋸歯状文類型”は文様が描かれ、粗製土器とすることはできず、主体を占める遺跡もある。また、ほかに粗製土器と言われるような、櫛歯状工具や安孫子の指摘したへう状工具による刺突文をもつ土器などが存在している。この土器は“鋸歯状文類型”とは異なり、静岡県などでは確認できていない。したがって、“鋸歯状文類型”は「局地分布型」と「広域分布型」の二つの中間的様相をもつものとして捉えることが出来る。したがって、今回検討した、多摩川流域においては「広域分布型」と「局地分布型」、そして中間的なもの（以下“中間型”と仮称する）によって土器組成が構成されていると捉えられる。

## 8. “類型”間の関係

“鋸歯状文類型”のなかには鋸歯状文によって生まれた三角形もしくは菱形の区画内に蕨手文を充填施文するものが見られる。このような土器は先述した三矢田遺跡例のほか、神奈川県茅ヶ崎貝塚や北川貝塚などで出土し

ている。これらの土器群は横位区画に依存した三角形もしくは菱形の2次区画内に蕨手文を充填施文する土器群で、文様帯は多段構成をとる。このような土器群が見られるのは第5段階と第6段階である。それ以前の段階においては、若干であるが、鋸歯状の2次区画と弧線の2次区画を合わせ持つ個体が存在する。しかしながら、鋸歯状の2次区画内に蕨手文や渦巻文が充填施文されることはない。また、第7段階においては“鋸歯状文類型”自体が減少するため、この土器群もみられなくなる。

この土器群の出現は「広域分布型」である“蕨手・渦巻文類型”の文様が“中間型”である“鋸歯状文類型”に取り入れられるということであり、「広域分布型」と“中間型”との間の関係性が変容したと捉えられる。

## おわりに

今回、多摩川流域とその周辺地域の前期後葉の住居址を集成し、住居一括資料をもとに諸磯a式から諸磯b式までの変遷を検討し、諸磯a式から諸磯b式を7段階に細分した。また、諸磯b式に蕨手・渦巻文類型と鋸歯状文タイプの2つを設定した。蕨手・渦巻文“類型”は「広域分布型」であり、鋸歯状文“類型”は「広域分布型」と「極値分布型」との中間的な様相を示すものであった。鋸歯状文“類型”は蕨手・渦巻文“類型”とは異なる製作システムを背景に持つものと考えられるものであり、それは一定地域に広がっている。しかしながら、蕨手・渦巻文“類型”の分布域より狭い。このことは鋸歯状文“類型”が蕨手・渦巻文“類型”によって他の地域と統合されているという様相を想起させるものである。また、その“類型”間の関係性は一定ではなく、変動していると考えられる。

他の地域の検討をしていない今、この“類型”間の関係を明確に示すことはできないが、この三者のよって構成される組成は土器を保有していた集団の規模や集団の移動—すなわち生活領域、地域間の交渉により形成されるものであると考えられる。この時、集団の地域間での交渉は釈迦堂Z3式や北白川下層Ⅱc式の伴出から、型式の分布域を超えるものであったことは明らかである。

今後、このほかの地域においても「局地分布型」や中間的なものにあたる類型を抽出していくことで、当時の生活領域と地域間の交渉を復元していくことが出来ると考えられる。また、鋸歯状文“類型”が分布する太平洋沿岸地域は群馬県や埼玉県のような諸磯式と北白川下層式との関係性とは異なる様相が予想されるものであるから、今後は鋸歯状“類型”の分布する太平洋沿岸地域における地域間の交渉について検討していく。

註

- (1) ここでいう“類型”とは、一般に使われている分類単位としての類型ではなく、鈴木徳雄による定義（鈴木2008）に従った。“類型”とは、他の土器群とは独立して系統的に変遷する土器のまとまりのことであり、系統的な変化をする土器群相互を比較することによって認識される。
- (2) “多段化”、“複合化”、“重層化”という用語については岩橋の定義（岩橋ほか1992）に依った。文様を横位に区画して重ねる方向性を“多段化”、異なる文様を重ねる方向性を“複合化”、横位区画がなされずに文様が重ねられる方向性を“重層化”としている。
- (3) 高橋清文が第29回の縄文セミナーにおいて「大膳野南類型」を提唱した際にあげた大膳野南貝塚出土土器もこのような土器である（高橋2016）。高橋は「大膳野南類型」について、「大膳野南遺跡出土例を指標とする。器形は諸磯b式で、口縁部が内湾ないしキャリパー状を呈する。文様は平行沈線紋が主体で、地紋がないことが特徴である。浮島Ⅱ式から浮島Ⅲ式期に見受けられ、浮島Ⅲ式期になると、茶屋類型のような浮島式の文様が採用されている。分布は東関東地方でも東京湾側に多い。」とまとめている。この記述からわかるように高橋はこの「大膳野南類型」を浮島式に含まれる類型として捉えている。また、高橋はこの「大膳野南類型」の文様を描く東海系の土器が岐阜県御望遺跡から出土していることを指摘し、「大膳野南類型」についても、東海地域との型式間交渉が存在していたとした。これに対して、松田光太郎は南関東西部の土器群ではないかという指摘をしている（註4）。松田のコメント部分については鈴木徳雄の論文にまとめられている（鈴木2016）。
- (4) 浮島式・興津式の細別と諸磯式土器との併行関係に関しては松田光太郎による細別案（松田1993; 1995）を採用した。その併行関係は  
 浮島Ⅰa式—諸磯a式新段階  
 浮島Ⅰb式—諸磯b式古段階～中段階  
 浮島Ⅱ式—諸磯b式中段階  
 浮島Ⅲ式—諸磯b式中段階  
 興津Ⅰ式—諸磯b式新段階  
 とされている。
- (5) 諸磯b式土器と浮島式の施文構造については鈴木敏昭によって詳細に分析されている（鈴木敏1984）。そこでは、浮島式の施文構造は横位の分帯が主であり、縦位の分割構造については意識さ

れていない。また、茶屋遺跡出土の諸磯b式土器についても、浮島式と同様に横位の分帯が主であり、縦位の分割構造は確認されなかったとしている。

- (6) 浮島式の影響を受けている土器群も存在する。鈴木徳雄は、茶屋遺跡出土の諸磯b式を標式資料とし「茶屋類型」を提唱している（鈴木1996）。利根川流域を中心とした北東関東分布する土器群である「茶屋類型」は、頸部にくびれを持ち、口縁部の外反する朝顔形の器形で、口縁部から胴部上半にかけて1帯の文様帯を持つ。文様帯は複数条の平行沈線紋によって区画され、その区画内には同様の施文手法によって菱形の区画が描出される。この菱形の区画内には蕨手文などが充填施文される。

引用文献

- 安孫子昭二 1983『小山田遺跡群Ⅲ』 小山田遺跡調査会。
- 新井和之 2008『雪ヶ谷貝塚』 玉川文化財研究所。
- 稲田孝司 1972「縄文式土器文様発達史・素描（上）」『考古学研究』18/4、9-25頁。
- 今福利恵 1999「山梨県内の諸磯式土器」『第12回縄文セミナー 前期後半の再検討』245-248頁、縄文セミナーの会。
- 今村啓爾 1980「諸磯b式c式土器の変遷と細分」『伊豆七島の縄文文化』49-52頁、武蔵野美術大学考古学研究会。
- 今村啓爾 1981「施文順序からみた諸磯式土器の変遷」『考古学研究』27/4、86-93頁。
- 今村啓爾 1982「諸磯式土器」『縄文文化の研究3 縄文土器Ⅰ』211-225頁、雄山閣。
- 岩橋陽一ほか 1992「諸磯b式土器の展開とその様相—多摩丘陵からの視点—」『研究紀要XⅠ』45-76頁、東京都埋蔵文化財センター。
- 岩橋陽一ほか 1990『成瀬西遺跡』鳴瀬西区画整理地内遺跡調査団。
- 江坂輝弥 1951a「縄文式文化について（その8）」『歴史評論』5/4、83-95頁。
- 江坂輝弥 1951b「縄文式文化について（その9）」『歴史評論』5/5、85-95頁。
- 江坂輝弥 1951c「縄文式文化について（その10）」『歴史評論』5/6、85-95頁。
- 近江 哲 2012「獣面突起の変遷—諸磯b式における文様との相関性から—」『考古学論攷Ⅰ 岡本東三先生退職とともに』205-236頁、千葉大学文学部考古

- 学研究室 考古学論攷編集委員会
- 大坪宜雄 1984『川島谷遺跡Ⅱ』。
- 勝又直人 1997『中峯遺跡』 静岡県埋蔵文化財研究所調査報告書第88集。
- 金持健司 2007「多摩ニュータウン遺跡群の時期別遺跡分布のあり方と住居跡数の変遷についてー縄文時代を中心としてー」『研究紀要XⅢ』51-73頁、東京都埋蔵文化財センター。
- 可児通宏 1991「縄文人の生活領域を探るー土器による領域論のアプローチは可能かー」『研究論集X』131-148頁、東京都埋蔵文化財センター。
- 川島雅人 1996『多摩ニュータウン遺跡 No.457遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第35集 東京都埋蔵文化財センター
- 栗原文蔵 1961『中川貝塚』 大宮市教育委員会。
- 呉地英夫ほか 1996『豎台遺跡発掘調査報告書』 稲城市豎台遺跡調査会。
- 小葉一夫 1988「多摩ニュータウン遺跡群調査ー丘陵地における集落構造の展開ー」『縄文人の生活領域を探る』 第1回多摩ニュータウン遺跡群を考えるシンポジウム発表要旨。
- 小坂隆司ほか 2000『代継・富士見台遺跡』 あきる野市代継・富士見台遺跡調査会。
- 小杉 康ほか 1991『真光寺・広袴遺跡群Ⅵ 三矢田遺跡』 鶴川第二地区遺跡調査会。
- 榊原政職 1921「相模国諸磯石器時代遺蹟調査報告」『考古学雑誌』11/8、1-23頁、。
- 縄文セミナーの会 2016『第29回縄文セミナー 縄文前期後半の型式間交渉の諸問題』縄文セミナーの会。
- 白石浩之 1983「諸磯b式土器の型式細分とその問題点」『人物・遺跡・遺物ーわが考古学論集1』195-207頁、溪水社。
- 新藤康夫ほか 2012『滝山高燥遺跡Ⅲ 梅坪沖の前遺跡Ⅲ』地域文化財研究所。
- 佐藤典邦 1991「浮島式土器の成立と展開」『埼玉考古学論集』341-360頁、埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 鈴木敏昭 1980「諸磯b式土器の構造とその変遷」『土曜考古』2、12-29頁、土曜考古学研究会。
- 鈴木敏昭 1984「茶屋遺跡出土土器の施文構造ー浮島式土器と諸磯b式土器ー」『茶屋遺跡』白岡町教育委員会。
- 鈴木徳雄 1979『白石城』埼玉県遺跡調査会。
- 鈴木徳雄 1989「諸磯a式土器研究史(1)」『土曜考古』13、57-84頁。
- 鈴木徳雄 1994「諸磯a式の文様帯と施文域ー文様帯の生成と変容ー」『縄文時代』5、53-76頁、縄文時代文化研究会。
- 鈴木徳雄 1996「諸磯b式の変化と型式間交渉」『縄文時代』7、1-32頁、縄文時代文化研究会。
- 鈴木徳雄 2008「型式学的方法③」『縄文時代の考古学』72-85頁、同成社。
- 関根慎二 1999「群馬県における諸磯b式土器の細分」『第12回縄文セミナー 前期後半の再検討』1-53頁、縄文セミナーの会。
- 関根慎二 2011a「諸磯式土器研究の回顧と展望」『第24回縄文セミナー 縄文前期土器研究の現状と課題』1-44頁、縄文セミナーの会。
- 関根慎二 2011b「諸磯様式における深鉢形土器の形式分化ー深鉢形土器の形式分化と時期差・地域差についてー」『研究紀要』29、71-90頁、群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 高橋清文 2016「浮島式の型式間交渉」『第29回縄文セミナー 縄文前期後半の型式間交渉の諸問題』63-100頁、縄文セミナーの会。
- 谷口康浩ほか 1980『藤の台遺跡Ⅲ』藤の台遺跡調査会。
- 谷口康弘ほか 2002『多摩市和田西遺跡』多摩市教育委員会。
- 谷口康弘 1989「諸磯式土器様式」『縄文土器大観1 草創期・』早期・前期』326-330頁、小学館。
- 土井義幸ほか 1993『舞岡リサーチパーク内遺跡』舞岡リサーチパーク内遺跡調査団。
- 中島 宏 1977『金堀沢遺跡発掘調査報告書』入間市金堀沢遺跡発掘調査会。
- 中島 宏 1980『伊勢塚・東光寺裏遺跡』埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集 埼玉県教育委員会。
- 中西 充 1986『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第6集。
- 中村哲也ほか 1989『半蔵窪遺跡発掘調査報告書』半蔵窪遺跡調査団。
- 西川修一・天野賢一 1997『宮畑遺跡(No.34) 矢頭遺跡(No.35) 大久保遺跡(No.36)』かながわ考古学財団調査報告25。
- 羽生淳子ほか 1983『稲荷丸北遺跡』ニューサイエンス社。
- 羽生淳子 1987「諸磯b式土器ー微視的にみた土器型式の地域性ー」『季刊考古学』21、40-44頁、雄山閣。
- 早坂広人 1993「“水子式”の誕生」『土曜考古』17、91-131頁、土曜考古学会。
- 早坂広人 2016「「諸磯式」120年史」『第29回縄文セミナー 縄文前期後半の型式間交渉の諸問題』1-34頁、縄文セミナーの会。
- 平澤勘蔵ほか 2008『上池上遺跡 上池台五丁目10番地の

- 調査』株式会社共和開発。
- 細田 勝 2002「諸磯式土器の変遷過程」『研究紀要』  
11、29-59頁、埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 松田光太郎 1990「浮島式土器の研究史 その1」『遡航』  
8、23-56頁。
- 松田光太郎 1992a「浮島式土器の研究史 その2」『遡航』10、41-64頁。
- 松田光太郎 1992b「浮島式土器の成立について」『古代』  
93、5-59頁、早稲田考古学会。
- 松田光太郎 1993「諸磯 a 式土器の文様とその変遷」『古代文化』45/6、314-327頁、古代学協会。
- 松田光太郎 1995「浮島式土器の研究」『古代探叢IV』
- 松田光太郎 1999「神奈川県における諸磯 a・b 式の様相」『第12回 縄文セミナー 前期後半の再検討』249-258頁、縄文セミナーの会。
- 松田光太郎 2008「諸磯・浮島式土器の変遷と型式間の影響関係」『神奈川考古』44、1-27頁、神奈川考古同人会。
- 山内清男 1928「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』43/10、463-463頁。
- 山内清男 1939『日本先史土器図譜 第二輯』先史考古学会。
- 山本孝司 1999「T.N.No30遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第187集 55-頁。
- 和田 哲 1993「多摩川流域の諸磯文化（1）」『多摩考古』23、1-10頁、多摩考古学研究会。
- 和田 哲 1994「多摩川流域の諸磯文化（2）」『多摩考古』24、14-23頁、多摩考古学研究会。
- 和田 哲 1996『縄文前期 浮島系土器論』
- 綿田弘実 2017「阿久Ⅲ期及び釈迦堂ZⅢ式土器」『第30回 縄文セミナー 前期中葉の型式間交渉の諸問題』80-100頁、縄文セミナーの会。
- 4、5、6：川島1996  
7、8、9：新井2008  
10：大坪1984  
11、12：谷口ほか1980  
13、15：平澤ほか2008  
14：小杉ほか1991  
15：山本1999  
17：平澤ほか2008  
18、19：小杉ほか1991  
20：谷口ほか2002  
21、22：中村1989

## 図版出典

- 第1表 筆者作成  
第1図 筆者作成  
第2図 羽生ほか1983、川島1996、小坂ほか2000  
第3図 岩橋ほか1990、川島1996  
第4図 新井2008  
第5図 大坪1984、谷口ほか1980  
第6図 小杉ほか1991、平澤ほか2008、山本1999  
第7図 小杉ほか1991、平澤ほか2008  
第8図 中村1989  
第9図 1、2：羽生ほか1983  
3：小坂ほか2000